

# 第1 ヒグマとは

## 1 ヒグマとは

●種名：ヒグマ

北海道に生息するのは  
亜種のエゾヒグマ  
北アメリカの亜種は  
グリズリー、  
ハイイログマ、  
ブラウンベアーと呼ばれる



●分類：食肉目 クマ科 ヒグマ属

●学名：*Ursus arctos*

亜種エゾヒグマは  
*Ursus arctos yesoensis*

●分布：北半球に広く分布する。

北アメリカ北西部、スカンジナビアからロシア東部、シベリアからヒマラヤ。  
また、ヨーロッパのピレネー山脈やアペニン山脈に孤立した個体群が分布。  
日本とその周辺では、北海道、国後島、択捉島、サハリン、中国東北部に分布し、渡島半島は極東地域における南限のひとつ。

●法律等におけるヒグマの取扱い

- ・鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律  
～ 狩猟鳥獣
- ・環境省レッドリスト  
～ 絶滅のおそれのある地域個体群（LP）  
：石狩西部及び天塩・増毛地方のエゾヒグマ
- ・北海道の野生生物 北海道レッドデータブック2001  
～ 地域個体群（保護に留意すべき地域個体群）  
：積丹・恵庭（石狩西部）のヒグマ個体群及び天塩・増毛のヒグマ個体群
- ・絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約  
（通称：ワシントン条約、CITES）  
～ 付属書II（輸出には政府発行の許可が必要）  
（ヒグマの中でも中国やモンゴルなどの個体群は付属書Iに分類）
- ・絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律  
～ 国際希少野生動植物種（輸出入及び国内における譲渡し等の規制）



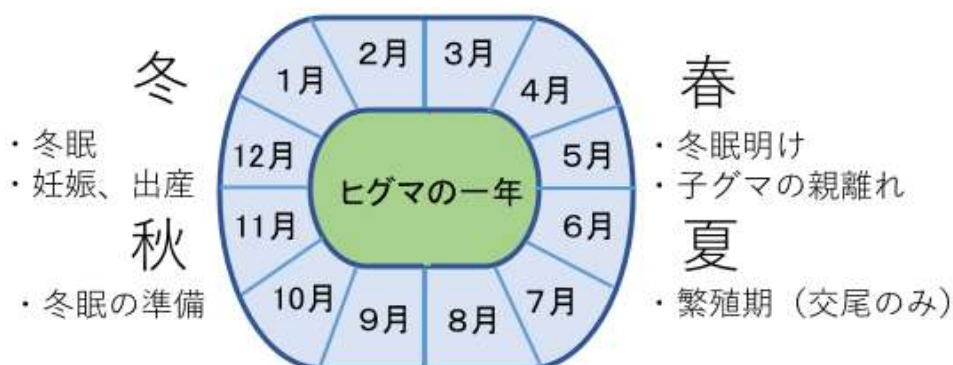
## 2 北海道のヒグマの特徴

- 特徴：体重は、オスで150～400kg、メスで60～150kg程度になる、日本に生息する最大の陸上動物。  
時速50km程度の速さで走ることができる。

毛色は黒褐色から茶褐色で前胸部に白斑があるものもいる。

- 生態：北海道では、ほとんどが落葉広葉樹林や針広混交林の森林地帯に生息。  
本来は行動が慎重で、人前に現れることを避ける。  
基本的に単独で生活する。食物条件により移動と定着を繰り返す。  
独占的な縄張りは持たないため、行動圏は個体間で重複している。
- 分布：北海道のヒグマの主要生息地は、低山の落葉広葉樹林や針広混交林であり、餌資源となる果実や種子を生産する落葉広葉樹や高茎草本の存在が生息地にとって重要と考えられている。  
行動圏サイズは地域や個体による差が大きく、また、餌資源の豊凶の影響も受けるが、オスで数十 km<sup>2</sup>～500 km<sup>2</sup>、メスで数 km<sup>2</sup>～数十 km<sup>2</sup> と、オスの方が広い範囲を行動する。メスオスともに行動圏は他の個体と重複し、縄張りはみられない。
- 食物：植物食の強い雑食性だが、肉食も好む。  
春にはザゼンソウ、イラクサ、エゾニュウ、フキなどの多汁質の草本、前年に落果したミズナラなどの実（ドングリ）、エゾシカの死体などを食べる。  
初夏にかけての食料は草本類が大部分を占める。  
夏になると草本のほかにシウリザクラやヤマグワなどの果実、アリを巣ごと襲って食べる。  
秋にはオニグルミ、ミズナラ、サルナシ、マタタビやヤマブドウなどの果実類が重要な食物となる。大雪山や日高山脈などの標高の高い地域では、ハイマツやコケモモなどの果実も食べる。
- 寿命：一般にオスに比べメスの寿命が長い。  
野生のヒグマでは満34歳前後まで生存したと考えられるメスが確認されている。
- 出産：メスは満4歳で出産が可能だが、5歳以下の初産の子育ては失敗することが多いようである。

### 3 ヒグマの生活史



#### (1) 春

冬の間は冬眠しており、地域や個体により異なりますが、3月下旬から4月下旬頃にかけて冬眠から目覚めて活動を始めます。

妊娠したメスは、冬眠中に出産します（1頭～3頭）。生まれた子グマは母親とともに行動し、翌年或いは翌々年に親離れします。

5月下旬から7月上旬は交尾期です。オスの成獣は発情したメスを探して広い範囲を行動します。

## (2) 夏

主な餌である植物の芽が硬くなり利用できなくなるこの季節は、食料を求めるための活動や移動が活発になります。

## (3) 秋

次の冬眠に備えて体に脂肪を貯め込むために大量の食物を摂取します。産卵のために河川に戻ってくるサケ科の魚類や、ミズナラやカシワ、ブナなどの堅果（ドングリ）が重要な餌資源であり、これらの遡上や実なりの状況により行動が大きく変わります。

## (4) 冬

地域により異なりますが、11月下旬頃から12月中旬にかけて冬眠に入りますが、年末頃まで足跡が確認されることも稀ではありません。また、近年はエゾシカの死体などを餌として冬眠しない個体がいる可能性も否定できません。

また、一般に妊娠しているメスは早めに冬眠穴に入り、翌年の1月下旬から2月にかけて1～3頭の子を冬眠穴の中で出産し、冬眠が明ける時期は最も遅いのに対し、オスは遅くまで活動して冬眠明けの時期は早い傾向があり、亜成獣の個体は成獣と比較して活動開始時期が早いとされています。

冬眠時期に関係することとして秋の主要な食物である果実類が凶作の年には冬眠に入る時期が早まり、豊作の年には遅くなる傾向があると考えられます。なお、飼育下にあるヒグマは、餌が与えられるため冬眠しません。

# 4 ヒグマの痕跡

## (1) 足跡

ヒグマは前足と後足で形状が異なります。野外では前足の足跡、特に肉球（パット）の部分が残りがやすくなります。指の数は前後とも5本です。普通に歩いたときの足跡では、前足の前に後足の跡が残ります。

※ 道南地区における研究では、前足の幅が14cm（道南では13cm）を超える個体は、オスである可能性が高くなるとされています。ただし、地面の固さや足のつき方によって、足跡の残り方は微妙に違ってきますので注意が必要です。

○ヒグマの前足（右）



○ヒグマの後足（右）



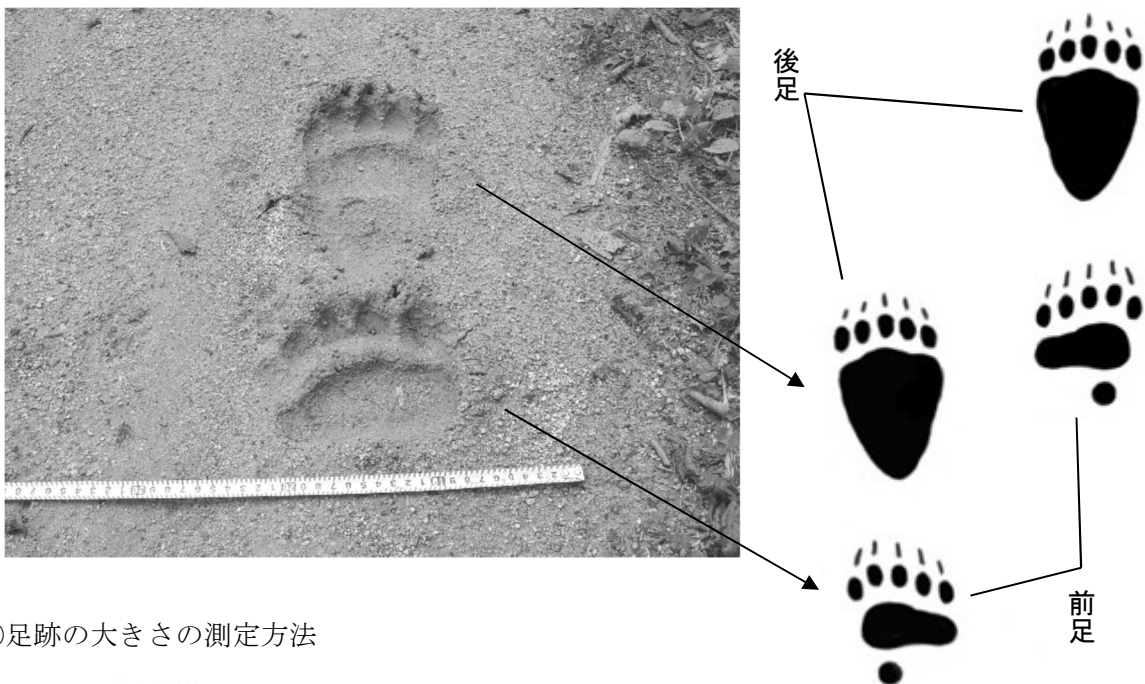
○ヒグマの足跡



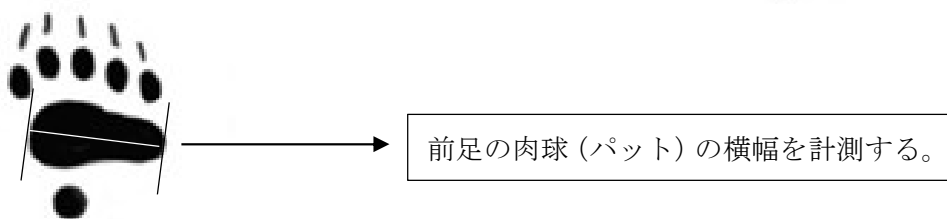
○雪の上の足跡



○ヒグマの足跡（拡大）



○足跡の大きさの測定方法



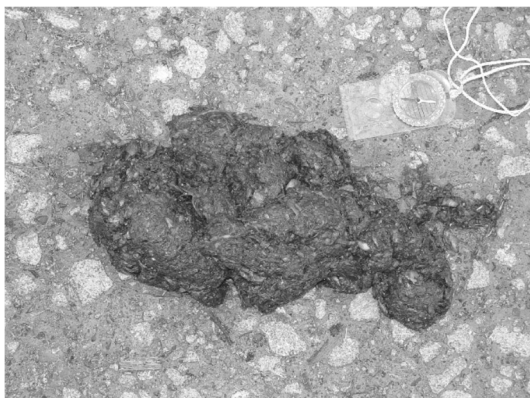
## (2) フン

基本的には太い俵型をしています。食べているものや時間の経過によって形状も変化します。また、ヒグマは消化があまりよくないため、食べたものがそのままの形で出てくることも多いのも特徴です。

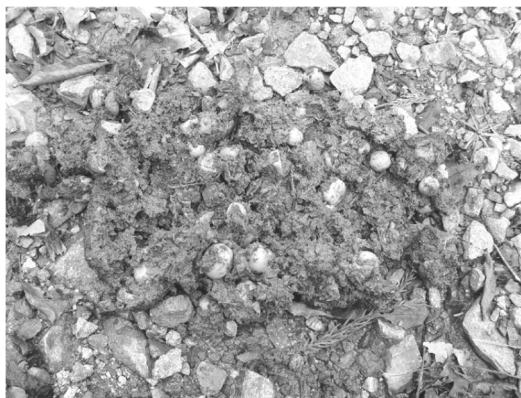
一般的にフンの直径が 4 cm 以上の場合はヒグマのフンの可能性が高く、フンの内容に甲虫が含まれていればタヌキなどの雑食性動物であると考えられます。

ヒグマのフンは、タヌキや放牧地のウマ、ウシのフンとの識別が必要ですが、個体ごとに摂食状況も異なることなどから、正しく判断するためには、ある程度の経験が必要です。

○ 草本



○ サルナシ (コクワ)



○ オニグルミの実



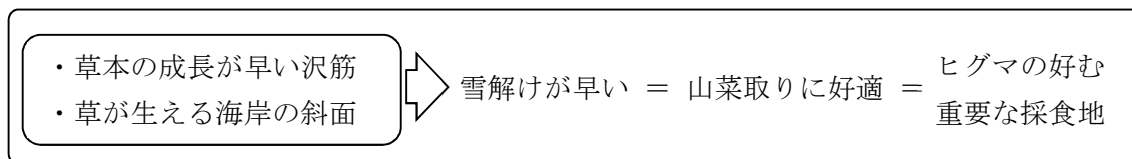
○ ミズナラ (どんぐり)



### (3) 食痕

ヒグマは食物を求めて移動をします。ヒグマの採食地と知らずに近付いてしまわないよう、注意が必要です。以下は季節ごとの具体例です。

春：冬眠あけの季節



冬眠あけの春先には、ヒグマは食物を求めて広く動きます。雪解けが早い春の山菜採りに適した場所は、ヒグマの採食地でもあります。

残雪の上や雪解け後のぬかるんだ場所など、ヒグマの足跡が残りやすい場所だけでなく、ヒグマが歩くことが多い沢沿いなどでも、足跡だけでなく食痕などのヒグマの痕跡がないかどうか、細心の注意を払ってください。

ヒグマはフキやイラクサ、セリ科のアマニュウやエゾニュウなどを特に好みます。



○フキの食痕



○エゾニュウの食痕



初夏～盛夏

夏場には、セリ科の草本、アリなどの昆虫類、ザリガニなどをよく食べます。

- ・ フキのよく生えている場所
  - ・ セリ科草本の群落がある場所
  - ・ ザリガニの生息する水辺
  - ・ アリ塚のある場所
- } 沢浴いはヒグマの絶好の採食地 = 特に注意

アリ塚が壊されていて、アリがまだ慌ただしく動き回っていたら、ヒグマが掘り返した直後かもしれないので、特に注意が必要です。

- ・ ヤマグワの生育している場所
- 草本類が硬くなり利用が減る盛夏の頃に熟してくるので、ヒグマが好んで食べます。  
林縁部に多く生えています。

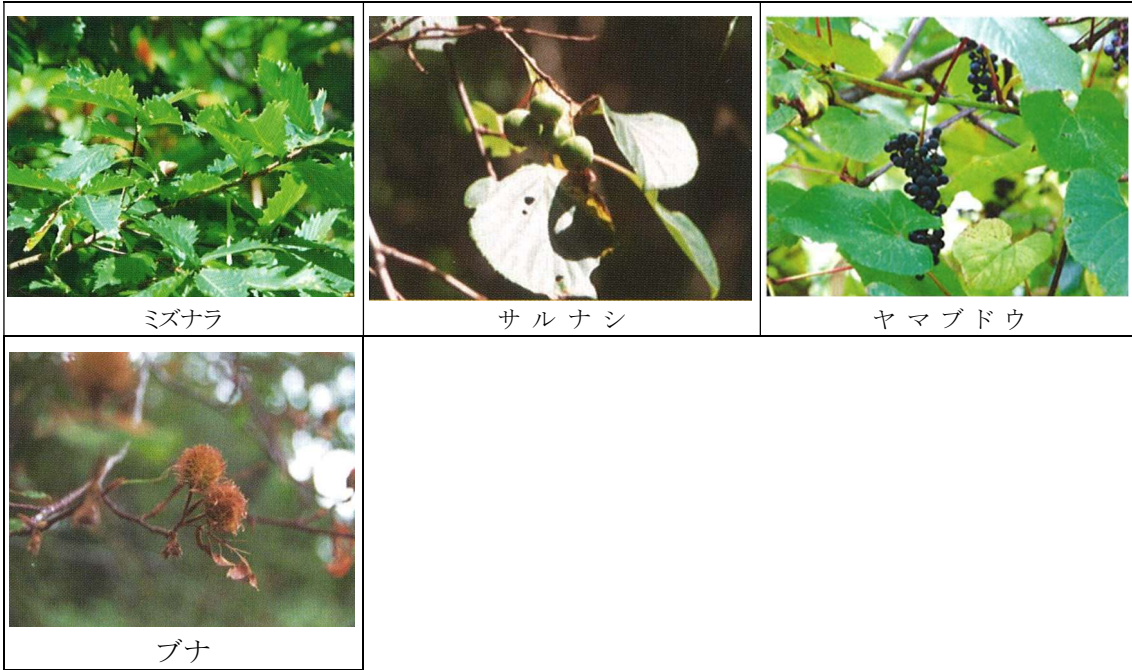
○掘り返し（倒木の下にアリ塚）



秋

秋には、冬眠に蓄えるために食物を多く摂ります。ブナの実やミズナラなどの実（ドングリ）、サルナシ（コクワ）やヤマブドウなどの果実類は特に重要な餌です。人間も利用する秋の実りは、ヒグマと競合しています。

また、この時期は食料が豊富にある木の上で採食していることもあります。



#### (4) 爪痕

木を登る時や木に背中を擦りつける行動を取る時に爪痕が残ります。

エゾシカが角を木に擦った時にできる跡と似ていますが、ヒグマは手や足の指の爪で跡を付けるため、複数の線が平行になっています。

#### ○爪痕



### 5 学習能力と人慣れ

ヒグマは学習能力が高いため、エサを手に入れる過程において、ポイ捨てされたゴミのように人からエサを得られることを覚えてしまうと、人家付近に出没し、ゴミなどを探すようになり、その結果、人への警戒心が低い個体が生まれてしまいます。

このような人慣れを起こさないためにも、人からエサを得られないような環境を構築することが重要になります。